

● 井上さんの書籍紹介

一殺到した患者と家族が笑顔を取り戻す—  
がん哲学外来の話

樋野興夫 著  
小学館 2008年9月 初版



はじめに

著者樋野興夫先生は、病理学者であり、哲学者でもある。病理医として、顕微鏡を覗いてがんの診断、研究をされている。一方で、そこから人間や人間社会のあるべき姿を追究されている。これが『がん哲学』なのである。

最近、「スピリチュアルペイン(霊的苦痛)」という言葉をよく耳にする。がん患者さんが感じる、死に対する恐怖、自分の人生、生きることに関する苦痛などを意味するのであるが、患者さんには何の解決法も与えてくれない。そのすき間を埋めてくれるのが、『がん哲学外来』であり、本書なのである。

著者紹介

1954年生まれ。順天堂大学医学部病理・腫瘍学教授。肝臓がん、腎臓がんの研究で、日本癌学会奨励賞、癌研究会学術賞、高松宮妃癌研究基金学術賞を、さらに第1回新渡戸・南原賞など多くの賞を受けられている。専門分野は、病理学、がん哲学。2008年1月から3月、順天堂大学医学部附属順天堂医院で『がん哲学外来』を試行的に開設された。

本書の内容・感想・まとめ

がんと診断されると、「なぜ自分ががんになったのか」と疑問を感じる。さらに、将来のことを考えると不安になる。

ある医師は「p53 と呼ばれるがん抑制遺伝子の異常がこのがんの原因である」と話してくれるかもしれない。また、ある医師は、患者さんの話を傾聴し、その後、抗不安剤を処方するのかもしれない。しかし、これでは解決されないところがあるのだ。

日野興夫先生はこのように答えられる。

『1個の正常な細胞の小さな遺伝子異常から始まる。それらの異常な細胞が1,000個あっても、大成するのはせいぜい1個で、ほとんどは途中で死滅する。その細胞が10億個までに増えて1センチの早期がんになるには5年から10年、さらに立派な臨床がんになるには20年はかかる。がん細胞も大成するには大変な時間がかかるのである。しかも、辛抱強く、いくつもの手順を着実に踏むという性質も持っている。』

このように説明されると、がんに対する見方が変わってくる。この優秀ながん細胞は20年間淡々と生きてきて、今も淡々と生きている。慌てふためいている自分が恥ずかしくなる。がんに『人生哲学』『がん哲学』を教えてもらいたくなる。さらに、続く。

『がん細胞は、他人からうつされたものでもなく、宇宙から飛んできたものでもない。たしかに「身の内」なのだ。がんになるとは、自分の子供がグレて不良息子になるようなものかもしれない

ない。あんなにいい子がなぜ不良になったのかと考えるようになり、どうやって更生させようかと悩み苦しむようになる。それと同じようなものだ。』

このように考えるとがん細胞を許せる気持ちになり、治療に専念できるようになるのではないだろうか。

再発、転移して厳しい状況の患者さんに対し多くの医師はこう答えるであろう。

「医学的にこれ以上の治療は難しい。あとは好きなことをして下さい。」さらに、「希望を捨てずに頑張ってください。」これでは、満足できない。

日野興夫先生はこう答える。

『それでも「死ぬ」という大事な仕事が残っている』

心の真ん中にストーンと入る言葉である。沈んでいた自分がフッと持ち上げられ、新しい視野が広がってくる。そうすると、くじけそうだった心に力が戻り、道を切り開いていく勇気とスタミナが出てくる。

ある人は、自分の生き方を孫に伝えるかもしれない。またある人は、自分の葬儀の準備をするかもしれない。

このことについて以下のように説明されている。

『日本は決まった宗教を持たない人が多く、国民性もとてもシャイです。しかし日本は、言語学が非常に発達している、言葉の豊かな国です。言葉によってイメージを喚起し、言葉によって考えを深めていく能力が高い。世界中から称賛される「武士道」を持つ、精神性の高い国民なのです。「死ぬ」という大事な仕事が残っている。」その一言で「分りました」となる。それが人間の力です。』

ご家族にも、肉体的、精神的なストレスが溜っている。第 2 の患者と呼ばれることもある。ご家族にかけられた言葉も載っている。少し抜粋する。

『最後まで見捨てないのが家族』

『「心配」は愛情ではない、むしろ負担になる』

『「to do」より「to be」 — 黙ってそばにいてあげるだけでいい』

最後に、私の座右の銘の引き出しにしまった言葉を記す。

『淡々と生きる』『勇ましき高尚なる人生(内村鑑三先生)』『真理は円形にあらず、楕円形である(内村鑑三先生)』

その他、本書には、「いのちとこころ」を支える珠玉の言葉が詰まっている。是非、読んでいただきたい。

会員 井上 林太郎